

V 果樹

実況

(1) 生育状況 (園芸研究センター)

「紅サシ」の累積生理落果数は、平年より少なく推移した(図1)。

胚固化完了期は5月28日で平年より3日早かった(表1)。6月20日現在の果実重は35.9gであり、平年の27.5gよりかなり大玉傾向である(図2)。

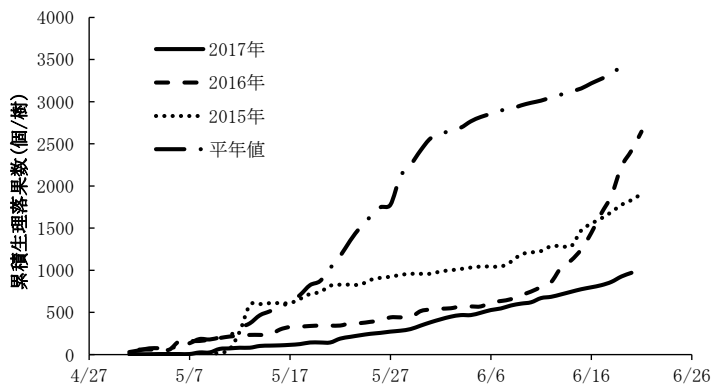


図1 紅サシの累積生理落果数

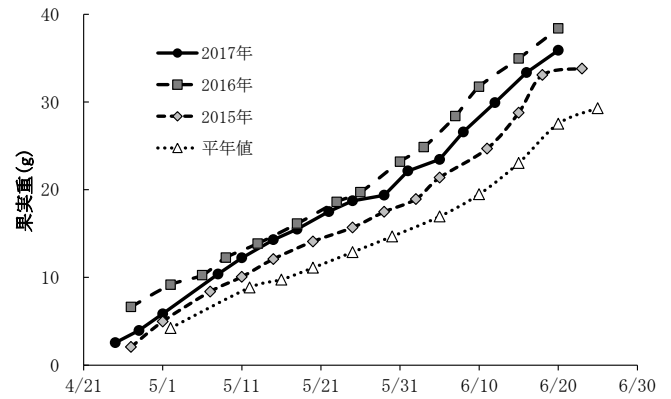


図2 紅サシの年度別果実肥大

※果実重 (M) は果実横径 (w) の測定値から計算式 $M = \pi \cdot w^3 / 5.88$ を用いて算出した

表1 紅サシの年度別発育ステージ

年度	短果枝花芽 (個/cm)	完全花率 (%)	結実率 (%)	開花期 (月/日)			開花日数 (日)	硬核期 (月/日)		胚固化期 (月/日)	
				始期	盛期	終期		始期	完了期	始期	完了期
2017	1.85	74.0	51.4	2/17	3/13	3/29	42	5/1	5/11	5/15	5/28
2016	1.83	62.7	38.3	2/14	3/3	3/14	30	5/2	5/6	5/13	5/23
2015	1.92	80.2	43.0	3/3	3/20	3/30	28	5/2	5/12	5/18	5/27
2014	1.28	72.9	52.2	3/4	3/18	3/26	23	5/2	5/12	5/19	5/30
2013	1.88	91.0	54.3	3/7	3/14	3/22	16	4/30	5/13	5/20	6/1
平年値(2007-2016)	1.60	77.7	54.9	2/25	3/11	3/22	27	5/1	5/12	5/18	5/31

(2) 地域状況

着果量は全域で前年および平年に比べて少なく、特に、開花時期の天候不順により「剣先」「紅映」で着果が少ない。

広域選果場は、「剣先」が6月1日、「紅サシ」が6月7日、「福太夫」が6月16日から取り扱いを開始し、7月2日まで集荷される計画である。また、今年から「新平太夫」も広域集荷が始まり、6月22日から7月2日まで集荷が行われる。

2 ナシ

(1) 生育状況 (農業試験場)

6月21日現在の果実横径は、「幸水」が37.6mm(平年36.5mm、前年46.4mm)、「豊水」が37.6mm(平年36.2mm、前年42.6mm)であり、両品種ともに平年並みで前年より小さく推移している(図3、4)。

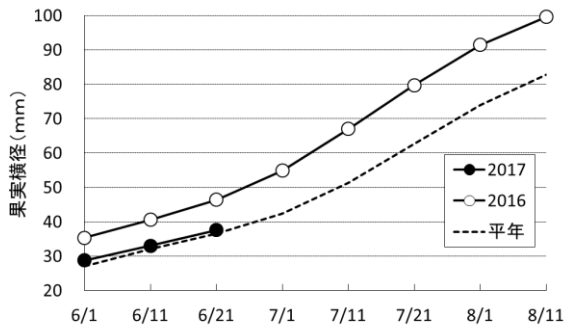


図3 「幸水」の果実肥大(福井農試)

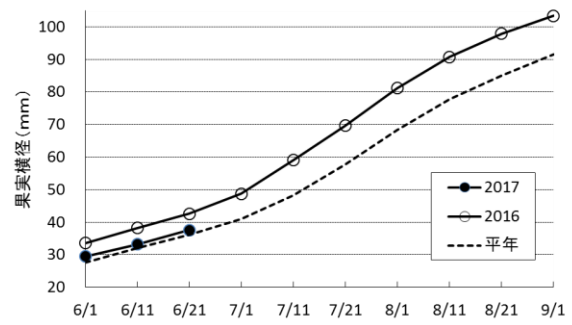


図4 「豊水」の果実肥大(福井農試)

(2) 地域状況

坂井管内における6月20日現在の果実横径は、「幸水」が38.9mm、「豊水」が37.0mmとなり、昨年より「幸水」で約1mm小さく、「豊水」で3mm小さく推移している。園によっては葉柄に黒星病が発生している。

二次摘果作業がほぼ終了し、摘心作業が実施されている。

坂井管内のハウスナシは7月下旬に収穫の見込みである。園地によっては、アブラムシ類やハダニ類の発生が見られる。

3 カキ

(1) 生育状況 (農業試験場)

6月21日現在の果実横径は、「刀根早生」が30.9mm(平年29.9mm、前年38.0mm)、「平核無」が31.1mm(平年27.6mm、前年38.9mm)であり、両品種ともに平年より大きく前年より小さい。

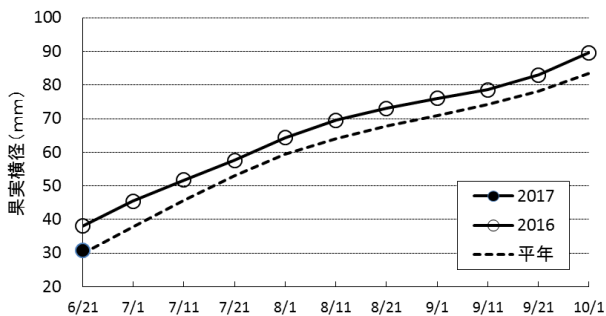


図5 「刀根早生」の果実肥大(福井農試)

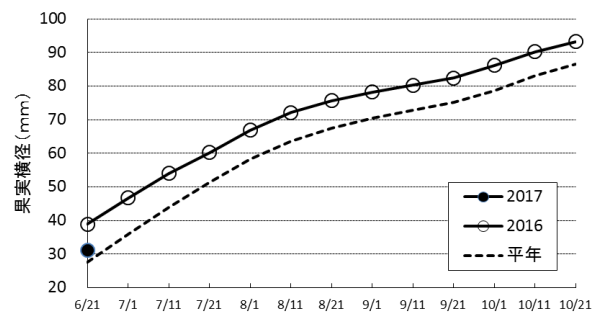


図6 「平核無」の果実肥大(福井農試)

(2) 地域状況

坂井管内および南越管内の着果は良好である。

4 イチジク

(1) 地域状況

若狭管内では、6月22日時点の展葉数は13葉程度で、結果枝の誘引作業は終了している。

5 ブドウ

(1) 生育状況(農業試験場)

場内の露地栽培におけるジベレリン処理は、表2の時期に実施した。

表2 品種別ジベレリン処理時期(中心日)

品 種	1 回目	2 回目
サニールージュ	6月1日	6月12日
ブラックビート	6月2日	6月14日
藤稔	6月1日	6月12日
シャインマスカット	6月 3日	6月16日

(2) 地域状況

無加温ハウス栽培におけるジベレリン処理は、1回目が5月中下旬に、2回目が5月下旬～6月上旬に行われ、いずれも前年より遅かった。引続き摘粒作業が行われ、果粒肥大が進んでいる。早い園地では6月下旬に果粒軟化期となった。

4月下旬以降、気温の高い傾向が続いており、新梢生育が早く旺盛に進んでいる。一部の園で灰色かび病や花ぶるい症状の発生が見られた。

対 策

1 各樹種共通

(1) 排水対策(梅雨期間中)

雨が多いと土壌が過湿状態になり、酸素不足によって根が傷むと湿害が発生する。特にイチジク・ブドウ・モモ・キウイフルーツなどの樹種は、湿害が発生しやすいので注意する。

排水の悪い水田転換園では、必ず園地内外に排水溝を設置するとともに、園地周辺の排水溝では停滞なく雨水が流出するか点検を行う。

降雨後の園内に停滞水が見られる場合は、水が溜まっている場所に明きょを設け、排水に努める。スピードスプレーヤーや運搬車(軽トラック等)のわだちなどが水たまりになっている場合は、土入れを行う。

(2) 干ばつ防止(梅雨明け後)

梅雨明け後に高温乾燥が続いて土壌水分が低下すると、葉のロール・黄化落葉となって水分不足の症状が現れる。根域の十分に発達していない若木では樹全体が枯死することもある。また、果実の肥大不良や陽光面の日焼けなど果実品質にも悪影響を及ぼすので、以下の管理を行う。

ア かん水

梅雨明け後に高温乾燥が続く場合は、早めのかん水を心がける。無降雨が1週間程度続いた場合、1回当たり15～20mm程度のかん水を実施する。特に、砂質浅耕土、根張りの不十分な幼木や浅根性の果樹では早めのかん水を実施する。

イ 草刈り・有機物マルチ被覆

土壌養水分の競合を防ぐため、梅雨明け後には草刈りを行う。

また、樹冠下に刈草や稲わら・麦わらでマルチを行うと、土壌表面からの蒸散を防ぐとともに地温を下げる効果がある。麦わらは、稲わらと比べ水を含んでも硬くならないので通気性が良く、土の表面を軟らかく保つことができるので、確保しておくといよい。

ウ 病虫害防除

乾燥が続くとハダニ類・スリップス類・カメムシ類などが発生しやすい。これらの発生状況をこまめに観察し、発生初期に農薬使用基準に従って薬剤散布する。

2 ウメ

(1) 礼肥の施用

花芽分化は7月下旬に始まるので、この頃までに樹勢を回復させ、葉中窒素含有率を高め、来年の花芽着生の向上をはかる必要がある。礼肥の施用によって、果実生産で消耗した樹勢の早期回復と貯蔵養分の蓄積をはかる。

収穫が終わった直後に、窒素成分で10a当たり約7kg(成木の場合)を基準として礼肥を施用する。ネット収穫している樹でも遅くとも7月上旬には施用する。

(2) 病虫害防除

毎年、環紋葉枯病や葉炭そ病など落葉病害の発生が見られる園では、発生予防のために薬剤散布を行う。

近年、イラガ類が6月下旬から、モンクロシヤチホコが8月上旬からと、それぞれの幼虫発生時期が早まる傾向にある。収穫後も定期的に園内を観察し、早期発見に努め、補殺や防除を行う。

(3) 「福太夫」の新梢管理

「福太夫」は新梢の発生が多く、かつ長く伸びやすい。秋冬季せん定で(今年の)新梢を切り返し、その先端で新梢が箒(ほうき)状に発生している場合は、台風など強風雨の際に枝折れや枝の裂開が発生する可能性がある。切返しせん定をした先端部分から多数の徒長枝(新梢)が発生している場合は、上向きおよび下向きの新梢を切除(間引きせん定)し、残した新梢はその長さの60%程度を目安に切り返し、強風に備える。

また、主枝分岐部付近のふところ部分で発生して、秋冬季せん定で切除する可能性が高い徒長枝は、日焼けの発生に注意しながら、基部から切除する。

(4) 一次加工の漬け込み

収穫した果実は、ゴミや汚れを洗浄機等で水洗する。完熟落下果実はケシキスイが侵入している可能性があるので、食害痕のあるものや侵入果は必ず選別して取り除く。

塩は生梅重量の18%を基準とし、ウメと塩を交互に入れ、樽の底は塩を少なめに、上に行くほど多めの塩を振る。梅酢が上がって、液面がウメを覆うようになったら重石を順次減らしていく。

(5) 一次加工の天日干し

漬け込んで1か月ほど経過した頃から天日干しを行う。

白干梅の水分は65%を基準に、64%から67%の範囲に仕上げる。干し上がりの水分はブリックス糖度計を用いて推定することができ、100から糖度計の読み取り値を引いた値が、おおよその水分となる(糖度計で33から35が目安)。

盛夏期の強い日射条件下で天日干した場合、果実表面の着色と乾燥だけが急激に進むため、せいろや寒冷紗等で覆って日射を和らげる。

なお、天日干しの際に「白干梅整列板」を用いることで、作業能率や品質の向上が期待できる。

3 ナシ

(1) 病虫害防除

先月に引き続き、黒星病および黒斑病の防除を行う。現在、黒星病の発生している園地が見られており、特に「幸水」では7月上中旬の果実でもっとも感染しやすくなるので警戒する。

園地を見回り、発病部位(特に葉柄)は見つけ次第除去し、土中深く埋める等適切に処分する。防除は有機銅剤、グアニジン系剤、Qo I 剤等をローテーションで用いる。かけ残し部分を生じないようにていねいに散布するとともに、防除間隔が空きすぎないように計画的に対応する。

また、ハダニ類は高温乾燥条件で発生が増えるため、梅雨明け後は圃場を巡回し、発生状況をよく観察する。草刈りをするとハダニ類がナシ樹に上がってくるので、草刈りと同時に薬剤防除を行う。

(2) 仕上げ摘果と「幸水」の裂果対策

圃場を見回りながら順次仕上げ摘果を行う。7月は果実がもっとも旺盛に肥大する時期であり、「幸水」では裂果が発生しやすい。裂果対策として予定着果量より10%程度多く着果させているので、裂果の危険がなくなってから最終着果数(10,000果/10a)まで摘果する。

(3) 新梢誘引

腋花芽を使って着果を確保する「幸水」などの品種は、新梢伸長停止期以降(7月上旬以降)に誘引することにより、腋花芽の着生を良好にすることができる。主枝、亜主枝の側面から発生した新梢を約45度の角度に倒す。昨年残した予備枝は水平に誘引し、予備枝先端の新梢が約45度倒れるようにする。成木で1樹当たり30～50本を目安に誘引作業を行う。

4 カキ

(1) 仕上げ摘果

大玉果を生産するため、摘果を徹底する。ただし、梅雨明けまでは生理落果のおそれがあるので、生理落果の状況を観察しながら、はじめは変形果・キズ果を除き、7月下旬まで徐々に摘果を仕上げていく。1結果枝につき1果に摘果してあっても、せん定程度が軽く結果枝数が多い樹では、着果過多になるので、葉果比で1果につき15葉程度を目安に摘果を行う。

仕上げ摘果後も、収穫まで順次見直し摘果を行う。

(2) 新梢管理

樹冠内部の通風・採光を妨げている枝や充実不良枝、骨格枝の背面から発生している徒長枝などは適度に間引く。新梢の間引き(枝かき・芽かき)は徐々に行い、枝かきしても二次伸長の恐れがなくなる8月下旬以降に、樹幹内の明るさを判断基準として枝数を調整する。

葉数が少ない老木や樹勢の弱った樹は、ねん枝により新梢を温存し、葉数を確保する。骨格枝上面から発生した徒長枝は、E型金具を徒長枝基部に取り付けて、水平に誘引し、側枝化に養成するのがよい。

(3) 追肥

樹勢が弱い樹を中心に、果実肥大を促進させるために、7月中下旬に年間施肥量の1割程度を目安に追肥する。ただし、樹勢が強く生理落果が多い樹では、この時期の追肥は行わない。

(4) 病虫害防除

害虫ではスリップス類、カイガラムシ類の防除を行う。梅雨が続くと落葉病、炭そ病が発生するので殺菌剤を混用して同時防除する。

5 イチジク

(1) 結果枝の摘心

20枚程度が展葉した頃に結果枝の摘心を行う。若木で樹勢が強い場合は、作業時期を遅らせ、8月上旬に夏季せん定で20葉を残して先端を切り返す。

(2) アザミウマ防除

アザミウマ類は、果頂部が開く時期(果実横径が25~30mmの頃)に果実へ侵入して内部を加害し、下から1~6段あたりの果実に被害が多くなりやすい。

防除は合成ピレスロイド系やネオニコチノイド系の薬剤をローテーションで使用する。耕種的防除では、シルバーマルチなどの光反射シートを樹冠下に敷くと、アザミウマ類の忌避効果がある。

6 ブドウ

(1) 袋かけ

果粉(ブルーム)をきれいに出すこと、日焼け防止、農薬による汚れ防止に有効である。露地、ハウス栽培ともにできるだけ袋かけを行う。

(2) 新梢管理

新梢の伸長継続による果房への転流不足や果房への適度な日射による着色促進を目的に、まだ伸び続けている新梢および副梢を摘心する。摘心後の副梢が再度、伸長した場合は1~2枚を残して摘心する。強樹勢で新梢伸長が秋ごろまで旺盛な場合は、植栽間隔を広げるなどの対策も検討する。

(3) 収穫

生育の早い園の早生品種は今月から収穫が始まる。

品種によって異なるが、収穫開始は糖度18度以上、酸度0.4~0.7を目安に収穫する。

着色の進行とともに、糖度は上昇し、酸が減少する。収穫は糖度を測定しながら計画的に行い、早どりには十分注意する。